

## Ⅱ－３ 高等部の実践

## Ⅱ－３ 高等部の実践

1. はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・	73
2. 実践Ⅰ 菓子工房・パッケージグループ 作業学習・・・・・・・・	76
～お客様の気持ちを考え接客しよう～	
3. 実践Ⅱ 菓子工房・クッキー製造グループ 作業学習・・・・・・・・	88
～作り手としての自覚を育てるために～	
4. まとめ・・・・・・・・・・・・・・・・	100

## Ⅱ－３ 高等部の実践

### １. はじめに

#### （１）高等部で目指す姿

本校では高等部の３年間で「卒業後に自分が希望する生活の実現を目指して自分の課題に意欲的に取り組む姿勢の育成」を目指している。この考え方のもと、それぞれの生徒が毎日を充実して過ごせるように学習活動を行っている。

キャリア教育の定義<sup>(1)</sup>の文言にある「社会的・職業的自立」がより間近に迫っている高等部というこの時期におけるキャリア教育はライフキャリアを視野に入れつつも移行教育<sup>(2)</sup>に軸足を置いた教育になる。将来の「社会的・職業的自立」のための意欲・態度の醸成、知識・理解の深まりを図る中で自己認識や自己効力感の拡大・更新をしていく育ちを期待している。

本校の高等部では

「働くことへの自信や前向きな気持ちを持つこと」

「自分が周囲から期待されているという意識を持てるようになること」

「卒業後の生活をイメージして実現に向けた目標を設定して実行努力すること」

「課題に取り組むためには今何が必要で何が足りないのかを生徒自身が考えて気づけること」

「生徒が自分たちで物事を考えて進めていくこと」

「自分たちが行っていることを自分たちの言葉で伝えられるようになること」

などを移行教育におけるキャリア発達として捉えている。

#### （２）教育課程の特徴

本校高等部では、表Ⅱ－３－１のように、「学ぶ」「働く」「暮らす」「楽しむ（余暇）」の４つのカテゴリで学習活動を構成している。

表Ⅱ－３－１ ４つのカテゴリでの学習活動

カテゴリー	各カテゴリでの活動	関係する教科等
学ぶ	<ul style="list-style-type: none"> <li>自分の課題となる事柄に取り組む活動</li> <li>身の回りの事柄について、教師や他の生徒と共に知ったり、調べたりする活動</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教科学習</li> <li>・「課題学習」</li> <li>・「選択教科」</li> </ul>
働く	<ul style="list-style-type: none"> <li>自分の役割を果たすことによって、他者から認められたり、喜ばれたりする活動</li> <li>自分に合った役割や職業について考える活動</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・作業学習</li> <li>・産業現場等における実習</li> <li>・企業就労アセスメント実習</li> <li>・職業科・職場見学 等</li> </ul>
暮らす	<ul style="list-style-type: none"> <li>自分の身の回りを整える活動</li> <li>衣食住に関する知識や技術、態度を身につけるための活動</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・日常生活の指導</li> <li>・家庭科</li> <li>・保健体育科</li> <li>・掃除 等</li> </ul>
楽しむ (余暇)	<ul style="list-style-type: none"> <li>自分の好きなこと、楽しいこと、面白さを追求する活動</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「趣味学習」</li> <li>・「ほんもの学習」</li> </ul>

このうち、「課題学習」「選択教科」「趣味学習」は学校設定教科であり、「ほんもの学習」「企業就労アセスメント実習」は、本校独自の取組である。

### ○本校高等部の作業学習の概要

本校高等部では、火曜日と木曜日の各 5 単位時間・計週 10 単位時間、作業学習を行っている。今年度は、菓子工房（クッキー製造とパッケージ）・クリーン工房・チャレンジ工房の 3 つの工房に分かれて取り組んでいる。

作業活動のメンバー編制については、前年度末に生徒に次年度希望する工房のアンケートを実施したり、生徒の課題や生徒間の相性等を考慮したりして、生徒が高等部の 3 年間で 2 つ以上の作業種を経験できるように配慮している。

移行教育における本校の作業学習で目指す生徒の姿は以下の 4 点である。

#### ①「教師の少ない支援で自主的に作業ができる」

必要以上に手を貸さずになるべく自分で作業をする姿を期待している。

#### ②「仕事に取り組むこと自体にやりがいを感じる」

作業を中断することなく黙々と丁寧に作業をする姿を期待している。

#### ③「周りの状況に応じて、臨機応変に対応する」

いろいろな状況を判断して心配りをしながら臨機応変に対応する姿を期待している。

#### ④「作業の活動の意味付け、価値付けができる」

目の前の作業を機械的にこなすのではなく「なぜ」「何のため」に今この作業をしているのかを理解して作業に取り組む姿を期待している。

以上のような目指す姿を踏まえて各作業工房で独自のねらいを設定して取り組んでいる。

また、平成 24 年度より各作業工房が相互に連携して生徒の自主性、主体性を引き出し高める取組として各作業工房の代表生徒で構成する作業学習委員会（プラタナス委員会と命名）を設置している。

今年度は以下のような取組を行った。

- ・各学期における各工房の目標を報告しあい、共通理解することで他の工房の様子を高等部生徒に伝えた。他の工房の様子を知ることにより、生徒たちはより広い視野から自分たちの工房の活動を意味付けることができた。
- ・学校説明会では、参加した外部の保護者や生徒に自分たちのことばで作業学習の概要説明を行った。自分たちがどんな作業をしているのかを自分たちのことばで説明できるようになってほしいと考え、高等部の説明の一部を生徒が担当した試みである。

### （３）今年度の取組

昨年度は作業学習モデルプランの充実を目指して校内資源に留まらず、社会との相互作用の中で実践的な作業経験を積むための作業学習の在り方について、実践を通して検討を行ってきた。その中で生徒の技能と働く上で必要な資質の向上が課題として見えてきた。

そこで今年度の研究では、生徒の技能と働く上で必要な資質の向上をめざした作業学習の充実改善を図るための授業作りを行った。

授業作りを行うにあたり、留意した点は以下の 3 点である。

- ・菓子製造グループとプラタナスカフェに作業学習アドバイザーとして洋菓子製造販売企業の常

務取締役とケーキ製造部部長と接客担当チーフの3名の方を招聘し、指導助言をいただいた。

- ・部の研究会で各作業グループの授業の様子ビデオを見て教師全員で生徒のキャリア発達を促す教師の支援方法や授業の在り方の検討を行った。
- ・作業のスムーズな運営を行うために前年度経験者の生徒数名が作業の内容や方法を伝える試みを行った。

以上の3点を踏まえながら実践Ⅰでは「カフェでの接客」、実践Ⅱでは「クッキーの作り手としての自覚」を生徒にどう意味付け、価値付けしていくのかについて授業作りを行った。

#### 参考文献

- (1)中央教育審議会答申(2011)「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」
- (2)国立特別支援教育総合研究所(2010)  
「知的障害教育におけるキャリア教育の在り方に関する研究」P24

## 2. 実践Ⅰ 作業学習「菓子工房・パッケージグループ プラタナスカフェ」

～お客様の気持ちを考え接客しよう～

### （１）菓子工房・パッケージグループ概要

#### ①はじめに

菓子工房は、クッキーを製造するクッキー製造グループと製品化して販売するパッケージグループの２つで構成されている。パッケージグループは、クッキーを袋詰めして商品化し、学校内ショップと学校外のプラタナスカフェの２か所で販売を行っている。プラタナスカフェとは金沢大学医学図書館ブックラウンジ（本校より車で５分ほどの場所にあり平成２６年１０月にオープン）の一角で、クッキーとドリンクの販売を行っている。プラタナスカフェは、学校外で社会人に直接接客でき、高等部におけるキャリア教育を在学中に実践できる貴重な場所である。開店時間前半は主に大学職員の方々、後半は学生が来客される。特に職員の方々は一歩リピーターが多く、生徒のことを理解してくださっている。そのおかげで、生徒はお客様のことを身近に感じ、特定のお客様のニーズを覚えることができ会話する場面も見られる。一方、学生は同じ白衣を着用しているので特徴を覚えにくく、生徒は毎回緊張感を持って接客している。今回の授業作りでは、接客で一番重要な“お客様を第一に考える姿勢”を身につけることを目標に単元を設定した。また、一緒に働く仲間を意識したり、助け合ったりしてカフェの運営ができるようになることも目指している。特に接客場面では、生徒自身が接客について自分の課題を見つけ努力したり、お客様の気持ちを考え自分の言葉で接客したりできることを期待した。



プラタナスカフェの様子

教師の支援に加え、昨年度からの継続で作業学習アドバイザー派遣も単元の中に組み入れ、生徒のキャリア発達の支援を行っていくこととした。

#### ②学習活動の内容

	作業手順	留意点
学校内準備	お客様に気持ちよく買い物をしていただくために鏡で身だしなみ、衛生面を自己チェックする	チェックポイントを明確に示し徹底する
	お客様の立場に立ってお互いの身だしなみ、衛生面を相互チェックする	お互い見てどうなのかということが、お客様から見てどうか？につながる意識を育てる
	商品を丁寧に扱い搬入準備（前回の在庫チェック、今日のクッキー販売準備、補充物準備、お釣り、注文書等）をする	クッキーが１枚でも割れたら商品として出せないという意識を育てる
	公用車で出勤する	送迎していただいたお礼を自分の言葉で言えるよう支援する

準備作業	図書館受付できちんと挨拶をして鍵を受け取り、開店準備をする。その際、勉強している学生の邪魔にならないように考え行動する	社会のマナーを身につけ、周りへの配慮を心がける習慣をつける
	iPad のスカイプで学校のショップとつなぎ、必要時連絡を取り合う 接客の様子に対する評価をタイムリーに伝える	素早い対応を行い、お客様に迷惑がかからないようにする 声の大きさや笑顔について、良い場合は褒め自己肯定感を高める
販売作業	クッキー、ドリンクの販売をする。間違わずレジを操作する。お客様の気持ちを考え接客する	慌てず、正確に丁寧な接客を心がける
	ラッピングを要求された時は、袋詰めをしてリボンを3色から選んでいただく	お客様と会話をして、ニーズに応える
	お客様が途切れた時間帯には、袋にシールを貼ったり掃除をしたり自分で仕事を見つけ取り組む	常にお客様が見えたらすぐに「いらっしゃいませ」が言えるような場所で、気を配る
閉店作業	閉店時間になったら、後片付けや掃除をする	周囲に気配りできる支援をする
	在庫管理をして次の必要物や申し送り事項をメモする	運営に携わる意識を育てる
	図書館受付できちんと挨拶をして鍵を返却する	感謝の気持ちを持てるようにする
	公用車で学校に戻る車中で、その日の売り上げを伝えたり、振り返りを行ったりする	販売意識を育てる 反省点があれば次回につながるよう支援する

### ③目指す姿（ねらい）

プラタナスカフェの実践は、社会との相互作用の中で、実践的な作業経験を積むための1つの在り方を探る実践である。そこで、以下のねらいで取り組んでいる。

- ・お客様の気持ちを考え感謝の気持ちを伝える
- ・自分で考えた言葉や笑顔で接客する
- ・スタッフ同士助け合い、カフェを運営する

### ④学習活動の様子

#### ア. プラタナスカフェの運営を担当する生徒の実態とねらい

今年度のパッケージグループには、1年生男子1名、2年生2名、3年生1名、合計4名の生徒が所属している。その中でプラタナスカフェの運営は1・2年生の3名が交替で行っている。

生徒	プラタナスカフェでの実態	ねらい
C男 (1年) 副工房長	<p>『技術面』</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・レジの操作はほぼ正確にできる</li> <li>・ドリンクを手早く入れることができる</li> <li>・お客様が途切れても、自ら仕事を探すことは少ない</li> </ul> <p>『接客面』</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・友だちと話す言葉遣いになったり、お客様の前で腕を組んだりしてしまう</li> </ul>	お客様にとって気持ちの良い接客を身につけよう

	<ul style="list-style-type: none"> <li>・きちんと理解していなくても「はい」と返事することがある</li> </ul>	
A子 (2年) 工房長	<ul style="list-style-type: none"> <li>・昨年に引き続き2年目</li> <li>『技術面』</li> <li>・レジの操作は慌てて間違えることがある</li> <li>・慎重になるがゆえに時間がかかることがある</li> <li>・お客様が途切れた時、進んで袋にシールを貼る</li> <li>『接客面』</li> <li>・お客様に対し「ようこそ」「ありがとう」の感謝の気持ちを持たなければいけないことは理解しているが、実際の接客場面では緊張し、声が小さく表情も硬い</li> </ul>	お客様に聞こえる声で接客しよう  感謝の気持ちを笑顔で伝えよう
B男 (2年)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・昨年度はクリーン工房</li> <li>『技術面』</li> <li>・レジの操作はほぼ正確にできる</li> <li>・ドリンクを作るのに時間がかかり、お客様を待たせてしまう</li> <li>・お客様が途切れた時、進んで掃除をする</li> <li>『接客面』</li> <li>・お客様の前でも集中力が切れてボーッとしてしまうことがある</li> <li>・特定のお客様のニーズを覚えていて、会話のきっかけになっている</li> </ul>	お客様を待たせないようにしよう  自分の言葉で接客しよう

#### イ. 今年度の授業作り計画

表Ⅱ-3-2 年間計画と授業作りならびにA子の内面の変化

4 ・ 5 ・ 6 月	4月 単元 パッケージの作業工程を身につけよう	
	I期 工房長としてみんなを引っ張っていかなければならないと思っている時期	引継ぎの生徒1人を期間限定で配置する  準備、すずかけクッキーの袋詰め、プレミアムクッキーの袋詰め、シーラー、カラータイ、納品、ドリンクの提供、レジ、シール貼り、後片付け
	5・6月 単元 プラタナスカフェでの販売、接客を身につけよう	
	II期 プラタナスショップの経験をもとに働く意識が変わる時期	I プラタナスカフェでの接客をビデオ撮影し、高等部教員全員で見て生徒のキャリア発達について話し合う① II プラタナスカフェでの接客をビデオ撮影し、A子と一緒に見て振り返る機会を持つ  5月26日 作業学習アドバイザー派遣 1回目
	III期 プラタナスショップの経験をもとに働く意識が変わる時期	A子がレジの間違いがなくなるまで、学校のプラタナスショップで練習することにする

7 月	7月 単元 接客について考えよう。自分の課題を見つけ、克服に向け努力しよう	
	Ⅲ期	← A子のプラタナスカフェ勤務を再開する
	9月 単元 全国中小企業経営者会議でクッキーを販売しよう	
9 月	Ⅳ期 プラタナスショップの経験を もとに働く意識が変わる時期	9月16日 全国中小企業経営者会議でクッキーを販売する プラタナスカフェでの接客をビデオ撮影し、A子と一緒に 見て振り返る機会を持つ 9月29日 作業学習アドバイザー派遣 2回目
	10月 単元 作業月間（毎週4日間）で継続して取り組み、自分の課題を克服しよう ドリングを2周年記念価格で販売しよう	
	Ⅴ期 お客様の気持ちを考えつつ、 一緒に働く仲間をフォローで きるようになった時期	毎週4回A子をプラタナスカフェの勤務とする A子が直接注文を受けたり配達したりする機会を作る 10月20日 作業学習アドバイザー派遣 3回目 プラタナスカフェでの接客をビデオ撮影し、高等部教員 全員で見て生徒のキャリア発達について話し合う②
10 月	11月 単元 新商品【プラタナスキューブ】を販売しよう 学習発表会でたくさんのお客さんの接客をしよう	
		← 12月1日 作業学習アドバイザー派遣4回目
	12月 単元 クリスマスのパッケージや飾りつけをしよう 今後提供する予定のカフェモカを練習しよう	
3 月		← 12月6日 市内のカフェへ行き、カフェモカを飲む機会を作る
	1月 単元 バレンタイン商品を販売しよう カフェモカを商品化しよう	
		← 1月12日 作業学習アドバイザー派遣5回目
	2月 単元 カフェモカとホワイトデー商品を販売しよう	
	3月 単元 プラタナスカフェの運営の引き継ぎができるようになる	

## （２）授業実践の経過

ここでは４月から１１月までの授業作りの中で見られた生徒の様子（Ａ子を中心に）について述べる。

### ①責任感と自信のなさで揺れるＡ子

#### ア．Ⅰ期 みんなを引っ張っていかなければならないと思う時期

４月から約１カ月は、前年度経験者のＤ男が引継ぎのため、一緒に働いていた。Ａ子は５月から自分１人だけがパッケージグループの経験者になるということで、他の生徒たちを引っ張っていかなければいけないという責任を強く意識し、作業があった日の連絡帳に必ず感想を書いていた。Ａ子の記録からは、しんどいと思いつつも前向きの姿勢が読み取れた。しかし、本来接客に苦手感のあるＡ子は、プラタナスカフェでは学校のショップ以上に緊張して声は小さかった（表Ⅱ－３－２ Ⅰ期参照、表Ⅱ－３－４ ４月参照）。

#### イ．Ⅱ期 自分の実力を自覚する時期

５月になり引き継ぎのため来ていたＤ男が別の工房へ異動となった。その頃からＡ子にレジ操作の間違いや、クッキーの計量ミスなどが目立ち始めた。今まで１人でできていたように見えていたことが、実は不完全だったことが明らかになった。Ａ子は自分１人でできていたと思っていたが、１人の力でできていたのではなく、実はいろいろな場面でさりげなくＤ男に助けられていたことが分かり自信を失いかけた。レジの失敗を意識し続けていて、失敗しないようにと思うがゆえに更に表情が硬くなり、接客場面で自信がなくなり、更に声が小さくなったようだ。Ａ子に実際接客しているところのビデオを見せ、お客様が聞き返している時は、声が小さく、Ａ子自身では声を出しているつもりでも伝わっていないことを伝えた。また一緒に働くＢ男に対し、自分と同じようにできていない時、責めるような言葉遣いをすることも多かった。

１回目の作業学習アドバイザー来校時、Ａ子は「レジで失敗しないためにはどうすればいいですか？」と質問したことから、Ａ子が自分の課題を意識していることが分かった。「いっぱい練習することです。」とアドバイスされた。また各工房から代表が集まり話し合いをするプラタナス委員会で、Ａ子は「レジが合わない。お金が合わなくて大変。」と言った。その場で、前年度経験者の生徒たちに「落ち着いて慎重にやれば大丈夫」「焦った時に間違いが起こりやすい」とアドバイスされた。教師ではなく、１年間一緒に働いた先輩に言われたことで、この言葉はＡ子の心に素直に届いたようだ（表Ⅱ－３－２ Ⅱ期参照、表Ⅱ－３－４ ５月参照）。

### ②自己認識でき、作業月間をきっかけに意欲的になるＡ子

#### ウ．Ⅲ期 学校のプラタナスショップでの経験をもとに働く意識が変わる時期

プラタナス委員会後、レジ操作に対して自分なりに努力しミスが減り始めた。今までは、お客様が沢山になると、焦ってミスしてしまうことが多かったが、レジのミスが減ったことでＡ子に少しずつ自信がつき始めたようだ。連絡帳には、プラタナスカフェに行けないことへの思いの記述はなく「１人お客さんが来てくれてうれしかった」「お客さんが少なくてしょぼん」などと書かれていた。プラタナスカフェに比べ、教師や保護者が主なお客様で、レジに何人も重なることのない学校のプラタナスショップでの勤務は、Ａ子にとって慌てず確実にレジを練習する良い機会となったようだ。この経験はＡ子の働く意識が変わることにつながった。ミーティングを重ねることで、生徒達は自分のできることを確実に増やすことが大切だと理解でき、お互い補ったり助け合ったりしてチームとして働く意識が育った（表Ⅱ－３－２ Ⅲ期参照、表Ⅱ－３－４ ６月参照）。

## エ. IV期 体験入学での経験を生かし、課題改善に努力する時期

5月は、たくさんのお客様が見えると、「焦ってレジでミスをして大変」と連絡帳に書いていたA子だったが、9月には、「たくさんのお客様が来てうれしかった」と書くようになった。働くことに喜びを感じられるようになったと思われる。また、体験入学の日にA子は、体験生にアドバイスすることを通し、「ちゃんとすなおで言うことをきいてくれたので、うれしかった」と連絡帳に書いた。体験生が素直に聞いてくれたことで一緒に働く喜びが感じられたようだ。また、工房長として保護者に説明をする際に、1日目は自分では大きな



ミーティングの様子

声を出しているつもりでも、後ろの保護者には聞こえにくかった。振り返りでそのことを伝えると、2日目は後ろの人まで聞こえるよう大きな声を出そうと努力する主体的な姿が見られた。

また、全国中小企業経営者会議で出店依頼があり、その会場でプラタナスカフェ経験者の3人がクッキー販売を行うことになった。初めての場所で販売に取り組んだ3人は、最初恥ずかしさと緊張からお客様に試食を提供する声が小さかった。しかし、係の方が見本を示し、一緒に声を出してくださったおかげで、3人とも次第に声が出るようになっていった。会場入り口まで出向き、試食を勧める3人の声が、入り口から離れたクッキー販売ブースまで聞こえるほどになった。A子の連絡帳には、「たくさんの方が試食をしてくれてうれしかった」と書いてあった(表Ⅱ-3-2 IV期参照、表Ⅱ-3-4 9月参照)。

## オ. V期 お客様の気持ちを考えつつ、一緒に働く仲間をフォローできるようになった時期

4月当初A子は、プラタナスカフェと一緒に働くB男が、ドリンクを準備する際時間がかかっていると、B男をせかすような言葉かけをしていた。しかし、この頃になるとA子は、B男をせかすのではなく、お客様に「少々お待ちください」と言えるようになった。また、別のお客様に対しては、タイミングを見計らって「新商品のプラタナスキューブです。良かったらどうぞ。」と言い、お客様に待ち時間を感じさせないような心配りも見られるようになった。毎週4回の継続した勤務は、課題を意識し続けやすく、一緒に働く仲間意識も育ちやすかったと思われる。

また、A子は、接客では笑顔が大切だと認識するようになったが、自分ができないことを自覚し、課題とするようになった。ビデオ撮影し、A子に自分の接客時の表情を見せると「無表情」と言った。それ以降のA子は、苦手感のある接客場面でも前向きに取り組もうという姿勢が感じられた。3回目の作業学習アドバイザー来校時には「どうやったら笑顔で接客できるのですか？」と質問内容が変化した。作業学習アドバイザーに「笑顔はお客様が来てくださってありがとう、買ってくださってありがとう、という気持ちから自然に出るものです」また、「誰かのことを考えただけで笑顔になれるような人はいませんか？」ともアドバイスされた。このアドバイスは、A子の心にとっても響いたようで、その後意識的に笑顔で接客しようとする態度が見られるようになった(表Ⅱ-3-2 V期参照、表Ⅱ-3-4 10・11月参照)。

### (3) 作業学習アドバイザー派遣の取り組み


今年度で2年目となる作業学習アドバイザー派遣の内容と、A子の課題意識、作業学習アドバイザーからの助言は、以下のとおりである(表Ⅱ-3-3参照)。1回目は、5月に市内の洋菓子

製造販売企業本店にて接客について講話を伺い、プロの接客場面を見学させていただいた。はっきりした聞き取りやすい声での接客、お客様を待たせない手際よいレジ操作など生徒たちは真剣に見入っていた。2 回目は 9 月に学校のショップで実際の接客場面を見ていただき助言をいただいた。また、生徒一人一人が接客での自分の課題について話し、アドバイスを受けた。3 回目は、10 月にプラタナスカフェでの A 子と B 男の接客場面を見ていただき、助言をいただいた。4 回目は、12 月、5 回目は 1 月に予定している。10 月は、昨年度作業学習アドバイザーに助言をいただき開発した新商品「プラタナスキューブ」（ミーティングで生徒達が命名した）を販売することで、接客の機会をより多く取り入れることとした。提供する前に、生徒達には材料に米粉を使っていることを伝え、試食をしてそれぞれの生徒が感じた食感や味、材料などをきっかけにお客様に自分の言葉で提供できるように支援した。教師もスタッフの一員として生徒と同じように仕事に取り組み、チームとなって互いに補い合い助け合う関係性を構築することとした。お客様、そしてスタッフ同士の関わり合いを大切にし、実際のやり取りの中から学ぶことができるような支援をした。そして、自らを振り返ることができるような問いかけをし、生徒が自ら考え気づきながら成長していけることを目指した。



作業学習アドバイザーから  
アドバイスを受ける様子

表Ⅱ－３－３ 生徒の課題意識と作業学習アドバイザーからの助言

日時	場所	内容	A 子の課題意識	作業アドバイザーからの助言
1 回目 5/26	メープル ハウス	接客について講話	レジのミスをなく したい	自信をもってできるまで繰り返し練習することですね
2 回目 9/29	学校 ショップ	本人からの課題に ついての質問	声が小さいので、も う少し声を大きく 出したい	どうして小さくなるのかな？ 緊張するよね 最初は誰でもそうだよ
3 回目 10/20	プラタナス カフェ	接客場面をみてい ただく		「誰かのことを思ったら笑顔になれる人はいないかな？」 「来てくださってありがとう 買ってくださいってありがとう という気持ちをいつも持とう」 「お客様の特徴を覚えたら、身近に 感じられるようになるし、お客様も 嬉しいよ」 〈後日のメールより抜粋〉 『カフェでの作業を拝見させていた だきましたが、2 人とも落ち着いて 接客ならびに作業ができていたと思 います。自分に見られている緊張感 もあったと思いますが、もう少し笑 顔があればなお良かったですね。』

作業学習アドバイザーに笑顔で接客する A 子

#### (4) 評価と考察

ここでは授業作りで留意した教師の手立て、支援を総括すると共に、そこでの生徒のキャリア発達について述べる。

##### ①作業の引き継ぎをスムーズにする

今年度、工房の作業の引継ぎがスムーズにできるように、パッケージグループでは、2年間所属していた3年生のD男を期間限定で配置した。D男は2年間の経験で作業内容は全てマスターしており、全体を見ながら必要なことに主体的に取り組んでいた。接客に際しても、お客様が好感を持てる発語や態度、お客様を待たせない行動、仲間を優しくフォローすることが身についていた。

A子とD男は、昨年度一緒にパッケージグループに所属しており、研究対象生徒であったため、お互い作業学習を通して近い存在であった。特にA子にとって、D男は先輩として憧れの対象であり、他の生徒もD男のことを仕事のできる頼もしい先輩と思ったようだ。今年1年目の生徒たちは教師から仕事を教えられるより、先輩を見本として憧れの気持ちを持ってスタートできたことは大変良かったのではないかと考える。A子は、次は自分が工房長としてみんなを引っ張っていかなければいけないという思いで精神的に重圧がかかっていたが、昨年D男に助けってもらっていたことを思い出し、自分も頑張ろうと思えたことは、1カ月一緒に働いていたからだと考察する。期間限定ではあったが、この取組は生徒たちが働くモチベーションを高め、生徒にとっては教師の支援以上に効果的であった。しかし、D男が別の工房に異動になってから、A子にレジ操作の間違いやクッキーの計量ミスが目立ち始めた。教師のA子に対する実態把握が不十分で工房長として頑張っている時に、一時的ではあったが、A子のやる気や自信を喪失させてしまったことは反省すべき点である。A子は持ち前の粘り強さと努力、教師の手立てでレジの操作をマスターし、立ち直ることができ教師は嬉しく思った。

##### ②作業をビデオ撮影して学部教員全員で生徒の支援方法について協議する

1学期にプラタナスカフェでの接客をビデオ撮影し、高等部教員全員で見て、A子の課題について共通理解をした上で改善方法について話し合った。結果、担任や作業学習担当教員だけでなく、高等部教師全員が各学習場面でA子の課題についての支援方法を協議できた。その効果として、A子も自分の課題を意識し続けることができ、予想以上に短期間で課題を克服できた。A子は更に次の課題を自分で見つけ、改善しようと努力する姿が見られた。そんな主体的なA子の姿勢は、他の生徒の良き見本となった。

##### ③作業学習アドバイザーに助言をいただく

接客のプロである作業学習アドバイザーにアドバイスいただけたことは大変有効であった。教師と違い、プロからいただく助言は生徒にとって特別な重みを感じられたようだった。3回目の当日、開店時刻前にお客様が来店し、生徒たちはどうして良いか分からなかった。アドバイザーは、2つの提案を生徒に示し生徒に選ばせてくださった。1つは「もうしばらくお待ちください」と言っていていつもより早く開店する。もう1つは「開店は10時30分ですから、その頃にまたおいでください」と言っていていつも通り開店準備をするというものであった。A子は悩んだが「もうしばらくお待ちください」と言った。初めてのことで声は小さかったが、いつもより手早く準備しようとする姿が見られた。クッキーを買いに来てくださったお客様の気持ちを考える大変貴重な機会となった。



お客様に背を向け作業をしていて  
お客様に気づかない様子



お客様が来店されたら気づくように前  
を向いて作業している様子

#### ④振り返りの機会を設定する ―問いかけと対話―

自分がどんな表情で接客しているのか、自分で認識することは難しいが、撮影したビデオを A 子自身に見せ、自分の課題について振り返る機会を繰り返し持ったことも有効であったと考える。笑顔がない自分を見て「無表情」と言った A 子は、家で好きなアニメや歌手の動画を携帯で見ても笑顔を出す練習をした。それでもお客様を前にするとなかなか笑顔が出なかった。A 子は、プラタナス委員会で先輩に相談したり、作業アドバイザーに質問したりした。できないとあきらめるのではなく、先輩や作業学習アドバイザーの方の意見やアドバイスをもとに改善しようという前向きな姿を引き出すことができた。

また、お客様が来店された時、1 番先に教師が「いらっしゃいませ」と声をかけている場面をビデオで見た際、教師が「どうしてかな？」と問いかけると、A 子が「お客様が見えたことに気がつかなかった」と言った。そこで、どうしたらいいか問いかけると、A 子が立ち位置を考え、少し狭いがお客様が見える位置でシール貼りをするようになった。そして、教師より先に「いらっしゃいませ」と言えるようになった。

#### ⑤接客の機会を充実保障する

体験入学時に保護者へ説明する機会や、初めての場所での販売経験をする機会、また昨年に引き続き、10 月の作業月間で週 4 回の継続的なプラタナスカフェでの勤務、さらに日頃あまり接触のない教師から直接注文を受けたり、デリバリーをしたりする取組は、A 子が自分の課題を意識し続け、主体的に取り組める機会となった。特に学校内ショップやプラタナスカフェではなく、地域社会に出て、一般の社会人の方々の中での販売活動は、おもてなしの心やお客様の気持ちを第一に考えたふるまいを考える絶好の機会となった。他の店舗の方々の接客の様子を見て、商品の並べ方の工夫や、お客様への言葉かけを目の当たりに学ぶ貴重な機会であった。終了後、多くの方々に褒めていただけたことも生徒達の自信につながったと考える。

#### ⑥自分の言葉で接客できるように支援する

新商品の販売に先駆け試食の提供を行ったことは、生徒たちが自分の言葉で接客できるようになる良い機会となった。最初は「新商品です」とか、「新商品のプラタナスキューブです」としか言えず、言葉が足りず販売しているのかと勘違いされ、学生のお客様に「結構です」と言われ、生徒ががっかりする場面もあった。「見せるだけ?」「商品名をお知らせするだけ?」と生徒たちに考える機会を与えながらも、目の前にお客様がいらっしゃるの、教師が横から「よろしければ試食なさってみてください」など言葉を付け加えていた。回数を重ねるうちに、「新商品のプラ

バナナスキューブです。試食をどうぞ。」とか「バナナスキューブです。良かったら試食をどうぞ。」など生徒一人一人がそれぞれ自分の言葉で提供するようになり、今では3名とも自信を持ってすらと言えるようになった。ラッピングのリボンの色の違いを聞かれたり、今までのクッキーとの違いを聞かれたりしても、慌てず丁寧に応対している姿から、一人一人の成長が感じられた。

またA子は、忙しくなっても多くのお客様が来てくれたことに喜びを感じるようになり、お客様を待たせないような心配りや自分で考えた言葉かけができるようになった。工房長として体験入学生に教えることを通し、それぞれの生徒が本人なりに頑張っていることを認め、強い口調で言うことはなくなった。さらに、お客様の立場に立って言葉を選ぶことができるようになった。ドリンクの提供にまだ時間がかかるB男の様子を見て、本人をせかすのではなく、お客様に「少々お待ちください」と言ったり、タイミングを見計らって新商品の試食を提供して、お客様に待ち時間をあまり感じさせない工夫ができるようになった。B男もまた、お客様を待たせないように考えるようになった。さらにB男は、学習発表会でお客様が沢山みえて忙しい中でも、ホットのドリンクを渡す際「熱いのでご注意ください」とお客様の立場に立った言葉を自分で考えて渡していた。思わず一緒に働く仲間から賞賛の拍手が起こった。

A子のB男への心配りや、お客様への心遣い、お客様の立場になって考える姿が、一緒に働く仲間の見本となり、他の生徒が学ぶ良循環となったと思われる。その後A子は「自分が実習に出て留守にしている間、カフェがうまく営業できているか心配」と巡回指導に行った教師に話すほどになった。

今回の実践では以上に述べた6点に留意して授業作りを行ってきた。バナナカフェの授業作りは、校内資源に留まらず、社会との相互作用の中で実践的な作業経験を積むための作業学習の1つの在り方を探る実践である。生徒の技能と働く上で必要な資質の向上に迫ることができたと考えている。

#### 【謝辞】

株式会社メープルハウスの皆様には、2年間にわたり作業学習アドバイザーとして、大変お世話になりました。紙面をお借りしてお礼申し上げます。

表Ⅱ－３－４ 教師の手立てとA子・B男の内面の推察

月日	教師の手立て・支援	生徒A子・B男の様子とA子の連絡帳の記述	A子・B男の内面(推察)	
			要求、知識、自己認識、自己効力感、その他	見取り、捉え、その他
4月 Ⅰ期	引継ぎの生徒1人を期間限定で配置する	目標を『声を大きくする』とした	D男がいるだけで笑顔になる(自己認識)	憧れのD男と一緒に仕事ができることに喜びを感じている
	自分で全部やらなければと思わず、D男や教師にも手伝ってもらえばよいとアドバイスする	「しんどい」 「3人に教えるのしんどい」 「フォローするの大変なことわかった」 「お金の計算がむずかしかった」	教えるの大変と思っている(自己認識)  お金の計算が難しいと思っている(知識・自己理解)  自分を教えていたD男も大変そうだった。私もあきらめないと連絡帳に書いている(要求)	反面、責任感が強く、工房長としてみんなを引っ張っていかなければならないという気持ちはある  昨年度自分が教えてもらっていた頃を振り返ることができ、自分もあきらめられないで頑張ろうと思っている
5月 Ⅱ期	A子に工房長をお願いする	「いろいろかんがえすぎて頭いたい」 「たくさんお客さんがきてくれてうれしかった」	工房長として頑張らなければと思っている(自己認識)	
	レジ操作が早く、間違いやすいので、もう少し丁寧に慌てずするように伝える	レジのミスが目立ち始める クッキーの計量を間違える  作業学習アドバイザーに「レジで失敗しないようにするには、どうしたらいいですか？」と質問した プラタナス委員会で「レジが合わない。お金が合わなくて大変」と言った	お金の間違いは良くないという意識はある(知識) 計算に苦手感がある(自己認識) レジまちがえるかと思うと、ちょっときんちようしたと連絡帳に書いている(自己意識) レジで失敗しないようにすることを意識している(要求)  レジ操作の失敗が続き、自己効力感が下がり、誰かに助けを求めようとしている。  これ以上自分では解決できないが何とかミスをなくしたいと思っている(自己理解、要求)	
6月 Ⅲ期	A子がレジの間違いがなくなるまで、学校ジョップで練習することにする	「計算がむずかしかった」 「1人お客さんが来てくれてうれしかった」 「お客さんが少なくてしょぼん」  「何か不安だった」	教師のアドバイスを素直に受け入れ、レジを慎重に操作しようとしている(欲求) 少ない人数のお客さんでも喜びを感じている(自己効力感)  プラタナスカフェに戻りたいと思っている(要求)	レジの失敗が減り、お客さんが来てくださることを喜べるようになってきた 学校のジョップはお客さんが少ないので、1人でも来てくださったことを喜んでいる  プラタナスカフェに戻りたいが戻れるか不安でもある
7月 Ⅳ期	A子のプラタナスカフェ勤務を再開する	午前のレジうち2回したけど、間違えてなかった	レジで失敗しないよう意識し続けている(自己認識) レジ操作に自信がついた(自己効力感)	久しぶりにプラタナスカフェ勤務ができ、うれしそう

9月 IV期	自分の課題を考えさせる  体験入学で保護者に工房の説明をする機会を作る  外部で販売する機会を作る  接客場面を撮影したビデオをA子に見せる  作業学習アドバイザーに質問する機会を作る	目標を『笑顔で接客する』とした  1日目は、声が小さく後ろの保護者には聞こえにくかった2日目は意識して、大きな声で説明していた  外部の販売で希望の仕事を聞くと「レジをします」と言った 「声がでかく出せた」  たくさん試食してくれてうれしかった  作業学習アドバイザーにA子「どうやら大きな声で接客できますか」と質問した B男「どうしたらボサーっとしませんか？」と聞いた	新たな課題を自分で見つけた(要求)  声を大きくしようと努力している(要求) 1日目の反省を素直に聞いて2日目改善した(自己理解) お客様が聞き直しをされたら聞こえにくかったと思っている(知識、自己認識)  レジの苦手が減り、積極的にしてみようという気持ちになる(自己効力感、要求) レジで間違っても焦らず取引中止を押し、ミスを避けることができた(知識) 1つ目の目標を意識している(要求) 試食していただいたことを喜びに感じるようになった(自己効力感)  自分の接客の様子を見て声が小さいと思っている(自己認識) 大きな声で接客したいと思っている(要求)  B男 お客さんの前でボサーっとしてはいけなと理解している(知識)	課題を1つクリアできたので、次の目標に向かっていく  体験入学での経験が生かされた  レジに対し、失敗を恐れず前向きな姿勢でのぞめる様になった  ビデオを見て自分を客観視できるようになった  2人とも自分の課題を自分で見つけている
10月 V期 作業月間	毎週4回A子をプラタナスカフェの勤務とする 接客場面を撮影したビデオをA子に見せる  試食を提供する言葉を考える機会を作った  実習のない日に単発でD男に応援を頼む  レジの横に鏡を設置する  接客場面を撮影したビデオを見せる  日頃あまり関わりのない人からA子が直接注文を受けたり、配達したりする機会を作った	たくさんのお客さんが来てくれてうれしかった  A子「無表情」  【プラタナスグループ】の試食の提供にあたり、自分の言葉で考えている  D男と作業ができてうれしかった D男としゃべるといつでも笑顔になる  A子だけでなく、B男も鏡をのぞく  B男「ボサーっとしてないよ」  自分でポスターの言葉を考えて書いた  作業月間の振り返りで、笑顔はまだ不十分なので、継続してオーダーをとると言った	笑顔をととても意識している(要求) 接客に笑顔がとても大切だということは理解している(知識) 自分の接客の様子を見て、「無表情」と言った(自己認識)  試食を提供しているのに断られ、自己効力感が下がってしまった。 B男 試食してほしいと思っている(要求)  笑顔を以前より出そうとしている(自己認識)  B男も笑顔を意識している(自己認識)  B男 ボサーっとしないようにしようと思っている(自己認識) A子は笑顔はまだ充分でないと思っている(自己認識・要求) 恥ずかしいけど頑張ろうと努力している(要求) もっと頑張って笑顔で接客したいと思っている(要求)	継続する中で改善しようとしている  他の生徒の言い方をよく聞いている  A子にとって、D男がいるだけで自然と笑顔になれるようになった  ある生徒の課題が一緒に働く他の生徒も意識している  A子は、さらに向上しようとしている  他学部の教員から褒められることで、少し自信がついた 満足しない、さらに向上しようとしている
11月	学習発表会でA子にクッキー販売のレジを任す  B男にドリンクを入れて渡す係を任す	レジを間違えないようにしようとしている 1万円札で払うお客様の対応に時間がかかる A子以外は、クッキー製造グループのメンバーだったので、率先して「ありがとうございました」と大きな声を出していた  「熱いのでご注意ください」と言った	間違えないようにしたいと思っている(要求) あまりやったことがないので時間がかかると思っている(自己認識) 自分が声を出さないといけないと思っている(自己理解・要求)  B男はお客様の立場になって考え、自分で言葉を考えている(要求)	A子は、レジだけでなく、大きな声を出すこと、笑顔で接客すること、すべてを意識している  B男は自分の言葉で接客している

### 3. 実践Ⅱ 作業学習「菓子工房・クッキー製造グループ」～作り手としての自覚を育てるために～

#### (1)「菓子工房クッキー製造グループ」の概要

##### ①はじめに

菓子工房クッキー製造グループでは、自分たちが作ったクッキーをパッケージグループに卸している。クッキーを製造するにあたっては、材料の分量が決まっていて、決まった手順に沿って作業を進めるため、技術面においては全員同じ進め方で行う。しかし、決まっていることができるようになって、自分の作り手としての立場やしていることの意味が分かっていることがなければ、自らが考えて臨機応変に動ける姿に繋がらず、作り手としての自覚も育たないとする。今回の授業作りでは、日々の生徒の様子を考慮した作業の取組、流通を学ぶための取組、そして新作商品を販売するまでの取組について述べる。

##### ②目指す姿（ねらい）

菓子工房は、クッキー製造グループとクッキー販売を行うパッケージグループに分かれているため、製造グループが作ったクッキーの販売に携わることは行事を除き、意図的に計画しなければほとんどない。手早くクッキーを作り上げることができるようになって、自分たちの作っているクッキーの流通を知り、作り手の先にある売り手や買い手（お客様）がイメージできなければ、本当の意味での丁寧な仕事はできないとする。

また、学校卒業後に必ずしも製造者として職に就くわけではないため、形式的な技術向上や量産を目指すことよりも以下のねらいで取り組んでいる。

- ・材料購入や配達をしてくれる工房に感謝し、作り手として自慢できるクッキーを作ること
- ・クッキー製造全般に関わる仕事について、必要性や意味を理解した上で自分から取り組むこと
- ・生徒が互いに必要に応じて協力したり、確認したりして作業を進めること

##### ③生徒の実態

今年度は、2年生男子1名女子2名、3年生男子3名の合計6名の生徒が所属している。

作業での実態	
E男 (2年)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・今年5月より他の工房からクッキー製造グループへ異動</li> <li>・仕事を覚えるまでに時間はかかるが、真面目に取り組んでいる</li> </ul>
F子 (2年)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・昨年に引き続き2年目</li> <li>・製造全般に必要な仕事はほぼ把握しており、活動の意味もある程度の理解はある</li> <li>・活動が繰り返され、慣れてくると丁寧に欠けることがある</li> </ul>
G子 (2年)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・昨年はパッケージグループ所属</li> <li>・製造全般に必要な仕事の中で、自分から率先して取り組める仕事はいくつかある</li> <li>・必要に応じた生徒同士の協力や確認は少ないが、丁寧な仕事を心がけて取り組める</li> </ul>
H男 (3年)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・昨年に引き続き2年目</li> <li>・製造全般に必要な仕事について、ほぼ理解しており、自分から様々な仕事に気づいて取り組めるが、仕事の意味や理解について尋ねると「分からない」と言うことが多い</li> </ul>
I男 (3年)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・昨年はパッケージグループ所属</li> <li>・教師や友だちの声かけや確認を求めて行動に移ることは多いが、自分の使用する道具の準備等については、声かけや確認を受けなくても自分から取り組める</li> </ul>
J男 (3年)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・一昨年前にクッキー製造グループに所属し2年目</li> <li>・製造全般に必要な仕事はほぼ把握しており、活動の意味もある程度の理解はある</li> <li>・リーダー性に欠ける部分はあるが、全体の流れの中で自分の仕事をこなし、丁寧を心がけて取り組める</li> </ul>

#### ④主な作業内容

##### ア. 生地作り

製造しているクッキーは、すずかけクッキー13種、プレミアムクッキー3種、ハーブクッキー5種、その他季節限定イベントクッキー数種と昨年度から作業学習アドバイザーを招聘し、製造面でのアドバイスをいただく中で作った新作商品（プラタナスキューブ）がある。

これらは、基本の作り方を覚えると比較的早く一人で作れる製造法になっている。また、新作商品も、基本の作り方と異なる工程はあるものの、基本の作り方を覚えていれば作れるようになっている。

##### イ. 生地を切って焼く

冷凍した生地を同じ厚さに切ってオーブンで焼く。

##### ウ. 製造全般に関わる準備、片付け

製造全般に関わる準備や片付けには、使用道具の準備や材料の計量、冷凍生地の整理などがある。一部、一人の生徒の仕事として固定している仕事もあるが、仕事の量は多岐にわたるため、その時の状況に応じて必要な仕事を自分で判断して取りかけられるようにしている。

#### ⑤年間の作業実施計画

以下のように計画しているが、ショップやカフェでの売れ行き、お客様からの注文依頼によっては計画と異なる場合もある。時季によって作る種類も異なる。作る種類も臨機応変に対応できるように生徒には、早い段階で製造に関わる内容について把握できる環境を整える必要がある。

また、毎月の作業の振り返り時や作業学習アドバイザー参加授業の前後、各工房の代表者が集まるプラタナス委員会からの話を聞いた際にはミーティングを実施している。

作業実施計画			
月	計画(単元)	種類	その他
4月	製造の仕事を知ろう	定番	・通年の作業内容の確認
5月	・製造に関わる事柄に意識を持つ ・自分の仕事や全般に必要な仕事を知る ・流通を知る		・企業見学、製造について講話 ・本校店舗見学
6月		ハーブ	
7月			
9月	効率的に仕事を行うための方法を身につけよう		・作業学習アドバイザー参加 ・プラタナスキューブ販売にむけて、試食会実施
10月	お客様に喜んでいただける 自慢のクッキーを作ろう	キューブ	・本校店舗見学
11月			・作業学習アドバイザー参加(2回) ・行事でのクッキー販売手伝い
12月			
1月		イベント	
2月			・作業学習アドバイザー参加予定
3月		↓ ↓ ハーブ	

※定番(すずかけクッキー、プレミアムクッキー)

※キューブ(プラタナスキューブ)

## (2) 授業実践の経過

### ①E 男が菓子工房の一員として自信をもって作業するために

#### ア. E 男の様子から教師が考えた支援

※E 男は 4 月当初は他の工房に所属していたが、作業の試行期間を終えて 5 月より菓子工房へ異動した。

表Ⅱ－３－５ 工房異動による E 男の様子

月日	教師の手だて・支援・声かけ	生徒の学習活動の様子	生徒の内面(推察)	
			要求、知識、自己認識、自己効力感	見取り、捉え等
4 月	担任の先生から作業異動の連絡「してほしい仕事がある…」を聞いて廊下をウロウロしている。何か話したそう…(作業の異動についてだろう)話を聞く「どうしたの?」	ええ!?僕???		・何でやる??? ・急に言われても…チャレンジ工房やったのに…
	幾つかやり取りをして…	「先生から、作業の、僕にしてほしい仕事があるって、クッキーで…」		・作業の変更に戸惑いと不安がある ・本当に僕が異動するのか確認している
	どうしても E 男にお願いしたいということと安心につながる言葉かけをする	「やったことない…えっと…できるかわからん…難しい…」 「…わかりました」	・クッキー製造は大変そうなイメージ(知識) ・やったことないのにできるのか?(自己認識)	・E 男の思うクッキー製造グループのイメージとすり合わせて不安が大きい

4 月は、工房を異動することが不安であったことが、上記の記録から読み取れる。クッキー製造グループでは、これまで生徒全員が一連の流れでクッキー生地を作れるように支援を行って作業をすすめてきたが、E 男の性格や特性を考慮した上で、E 男には、製造全般の仕事で生地を作るために必要な準備の仕事を主に取り組む形で作業をすすめることにした。他の生徒に対しては、E 男の仕事が自分たちにとっても有用であることを感じられるように場面に応じて確認、声かけしながら授業に取り組んだ。

#### 支援のポイント!

- ・作業での一連の工程が 1 人でできるようになるという従来の支援方法から、生徒に応じた仕事内容を精選するという支援方法を選ぶ
- ・生徒に応じた仕事の内容が他の生徒にとって必要で意味のあるものであること

### イ. E 男の様子と教師の手立て・支援

表Ⅱ－３－６ クッキー製造グループに異動してからの様子

月日	教師の手だて・支援・声かけ	生徒の学習活動の様子	生徒の内面(推察)	
			要求、知識、自己認識、自己効力感	見取り、捉え等
5 月 10 日	包丁の使い方、アーモンドの切り方について見本を示す(手を添えて)様子を見ながら声かけする	じっと見て、聞く様子 とてもぎこちない様子だが、一生懸命、慎重に作業を進める	・アーモンドを切るときに必要なことについて知る(知識)	
	チャレンジ工房で作っているクッキーペーパーの使い道について伝える	クッキーペーパー知ってる? …「見たことある」	・チャレンジ工房で作っているペーパーが使われていることを知る(知識) ・ボウルについた生地をふき取るのにペーパーが必要と知る(知識) ・生地に含まれる油分を水道に流さないため、水の汚れを少なくするためと知る(知識)	
	ボウル、ヘラの拭き方を見本を示して伝える ミキサーのハネの生地拭きを説明する	理由を伝えると…「すごい」 話をよく聞いている		きれいに拭こうとしている
	台拭きを 2 枚準備して作業台に置くように伝える	指示を聞いて取り組むが…タオルは絞ったままの形状で置いていた		他のことを考えている?
5 月 12 日	クッキーの型はずしをしてほしい	やってみるが、上手くいかず…「うーんむずかしい…」		思うように型がはずれない
	アーモンド切りをしてほしい	自分で必要な準備をして取り掛かり、細かくなったら報告した 「慣れてきた」	やり方は覚えていた(知識) 前にやっているからできると思う(自己認識)	
5 月 19 日	この前より上手になっているよ	アーモンド切りの仕事に…「できました」	このくらいの細かさに切る(知識)	「これはできる」と思っているかも
	確認して一回で OK だいたいこれくらいかな? というのが分かってきたね	「はい」	自分にもできる(自己認識、自己効力感)	

月日	教師の手だて・支援・声かけ	生徒の学習活動の様子	生徒の内面(推察)	
			要求、知識、自己認識、自己効力感	見取り、捉え等
5月31日		気持ちが沈んでいる(体調不良?)		話を聞いていると実習前の不安が体調不良として表れている
	作業での頑張りを話す	養護教諭から「アーモンドはE男が切ってるの?」「おいしいよね」と言われ、少し表情が明るくなる	自分の切ったアーモンドのクッキーをおいしいと言ってくれた(自己効力感)	
6月上旬	前期にできるようになったら良い仕事内容についてチャレンジ作業用紙を作成する	仕事を忘れたときに確認できるので安心している様子		状況を見て判断するにはまだ時間がかかるかも
7月上旬	チャレンジ作業用紙とは別に状況を見て仕事に取りかかる方法を伝える	真剣に話を聞き、行動を目で追っていた		ひとつの仕事に限定すれば早く覚えられるかな
7月下旬		アーモンドのフレーバーカードを確認して自分でアーモンドを切る準備を始めた		今までは必ず何をすればいいか聞いていたが、細かく伝えたことで自分で仕事を探せるようになったかも
		「できました」 他の生徒から「ありがとうございます」と言われ、嬉しそう		
	細かく切れてるね! 包丁を使うのも慣れて早くなったね	「はい。ありがとうございます」	自分で判断したことが評価された(自己認識、自己効力感)	
9月8日	作業後高等部エリアでE男に会う(E男は体調不良で作業不参加) 何か言いたそう… 「どうしたの?」	「あの…体調が悪くて…」 「作業出れなくてすみませんでした…」と言いながら半泣き		作業に出られなかったことを申し訳なく思っている
9月12日	「体調よくなった?」 「明日の作業大丈夫?」	「大丈夫です」 「この前は作業できなくてダメやと思ったけど…」		
	「何でこの前はダメやったん?」	「みんなやとるのに…」 「みんなに時間かけてしまう…」	人数が少ないと、クッキーを作るのに時間がかかってしまう(知識)	自分の仕事ができないことに責任を感じている?
	「時間かけるって?」	「準備……アーモンドとか…」		作業内の自分の役割について認識している??



仕事内容を確認するE男



アーモンドを切っているE男

## ウ. 取組を振り返って

今回の取組を振り返るといくつかの成果が挙げられる。E男が製造の中で行われる様々な仕事の中で、自分の仕事として責任を持って自分から取り組める仕事ができたと(表Ⅱ-3-6 7月下旬参照)。また、E男の仕事が、他の生徒にとって作業を進めるうえで必要な内容であったことから、「〇〇できました」「ありがとうございます」と作業内でお互いに声をかけあう場面も見られ、E男にとっても他の生徒にとってもお互いの存在を認めあう意識が育った。

5月当初には、工房の異動が不安であったE男だったが、9月に体調不良で作業に参加できなかったときには、自分が作業に出ないことで準備ができず、他の生徒に時間をかけてしまうことについて申し訳なく思っていたようだった。このことから、所属意識が強くなったと感ずることになった(表Ⅱ-3-6 9月8日、12日参照)。

## ②作り手としての自覚をもって作業に取り組めるために ～流通を知る～

### ア. 生徒の様子から教師が考えた支援

(1)「菓子工房クッキー製造グループ」の概要でも述べたが、本校の作業では、クッキーの製造と販売が分かれているため、製造グループの生徒は、お客様がクッキーを購入してくださる場面を見ることはほとんどない。学校生活を過ごす中で、見たり聞いたりしてクッキーの販売はどこで行っているかを知っている生徒は多いが、実際に自分が作り手として、売り手やその先の買い手（お客様）に提供する意識を持っているかどうかについては疑問である。そこで、実際に感じる体験として、本校にあるプラタナスショップと金沢大学医学図書館内にあるプラタナスカフェに見学に行くことにした。プラタナスショップでは、自分たちが作ったクッキーの袋詰め作業を見学し、店内に陳列されているクッキーを実際に見たり、パッケージグループの仕事を確認したりすることはもちろん、自分がクッキーを購入する側となってイメージできるように取組をすすめる。また、プラタナスカフェでは、実際にカフェで提供しているコーヒーと自分たちが作っているクッキーが合うのか確認することを通して、お客様の立場になって品質の向上につながるように取組を進める。見学の前には、自分たちの作っているクッキーの種類などの理解の確かめも行う（表Ⅱ－3－7 太枠参照）。

#### 支援のポイント！

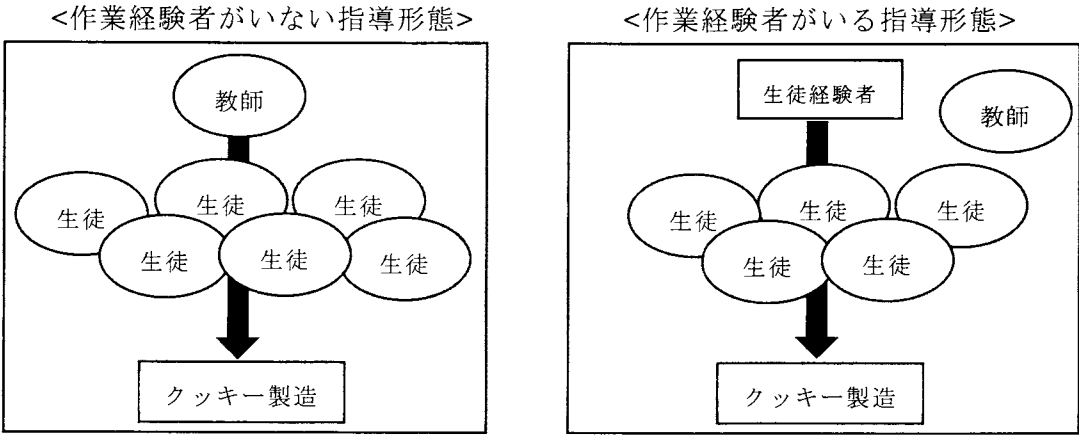
- ・工房で自分自身が行っていることが何とどうつながっているのか、自分たちとその先にある現状を知る
- ・お客様の目線から考えられること、作り手としての意識付けをする

### イ. 生徒の様子と教師の手立て・支援

表Ⅱ－3－7 ミーティングでの様子

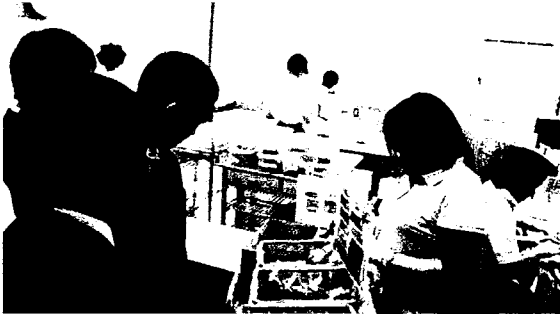
月日	教師の手だて・支援・声かけ	生徒の学習活動の様子	生徒の内面(推察)	
			要求、知識、自己認識、自己効力感	見取り、捉え等
5月 月上旬	「クッキー作りは完璧？」	G子…「まだ不安…小麦粉とか混ぜるのが…」	まだ、生地を混ぜ込むのは完璧じゃない (自己認識)	
	「経験者と未経験者と差があってもそれぞれに頑張れることはあるよね」(経験者の役割について確認)			
	J男も「仕事を覚える」目標であることを伝える	E男…うなずく		一昨年前経験があっても、目標は一緒なんだ…安心
	「今の調子のまま、昨年の本数を作ろうとすると、給食時間がなくなるね」	H男…「給食に間に合わないから20本でいい」	・12時10分に作業を終えて、給食を食べたい (要求) ・20本作ると時間内に作業を終えられる(知識)	今の作業の様子では、20本以上になると時間内に終了できず、残業になり、給食を食べる時間が遅くなることを嫌がっている
	1年間に予想されるクッキー注文の量を確認	E男…「うわぁ～大変、やばい」 「20本だけじゃあ間に合わない」 G子…「…」 J男…「え～」	月ごとに予想される注文が多いことに気づく (知識)	今のまま作業をしても予想される注文をこなせないと思っている
	自信なさそうなE男をフォローする	E男…はい	・仕事を覚えてできるか不安、大丈夫かな… (自己認識)	・みんなで協力しながら作業する(助け合う)ことを確認したことで、やってみよう！と思えたかな…
	パッケージに出せないクッキーについて伝え、具体的に見せる	G子…「何か入っている。これはお店にだせません」 H男…「砂糖のかたまり」 E男…「…」(じっと覗き込む)	・G子は商品として袋詰めされるクッキーの基準を知っている(知識) ・H男はクッキーの表面に砂糖の塊があると売れないことは知っている(知識)	・G子は昨年の経験から判断できることがある ・H男はお店に出すクッキーと出さないクッキーの違いを知っている ・E男は何が入っているのかじっと考えているがわからない模様
	クッキーの種類をいくつか質問する 「何種類？」	E男…「アーモンドとくるみ、一緒に見える」 G子…「わからない」 H男…「13」 G子…「14？」	・H男はクッキーの種類がしっかり頭に入っている(知識) ・種類を知る(知識)	・G子は、忘れたのだろうか？

今年度、4月当初から昨年度クッキー製造グループ経験者2名を中心に作業が進められるよう、教師は、一作業員としてなるべく生地作りの製造工程において、主とならないように作業を進めてきた。見学の前に、自分たちの仕事や内容について確認したが、曖昧な点も見られた。仕事はしているものの、まだ、生徒自身が自分の仕事としての自覚の認識が育っていないことが分かった。



表Ⅱ－３－８ プラタナスショップ見学での様子

月日	教師の手だて・支援・声かけ	生徒の学習活動の様子	生徒の内面(推察)	
			要求、知識、自己認識、自己効力感	見取り、捉え等
5月 月上旬	袋詰めで手袋をしている理由を伝える 「もし手が汚れてたら…クッキー食べる？」	J男は手を振る(NO) F子…「汚いから嫌です」		清潔にクッキーを袋詰めするために手袋をしていることは知っている
	パッケージグループの説明を聞き、袋詰めたクッキーを売するための工夫をしてくれていることを伝える	話を聞いている	パッケージグループの仕事を知る(知識)	カラータイをして見た目の工夫もしていることを知る
	店頭のクッキーを確認したが…	生徒…「えっ??」 「ほとんどない!」		お店にクッキーがほとんど並べられていないことに気づいた
	「どうする? お店にクッキー並んでなかったら?」	J男…「こんな店いやだー僕ならもういかない」 F子…「私も嫌です」 数名…うなづく		お客様の立場で考えている
	「何でないのかな?」	J男…「僕たちが作って袋詰めしてもらわないと商品にならない」	・まだ製造の仕事を覚える段階だが、今の作業の様子では、クッキーが店頭に並ばないことを知る(知識、自己認識) ・店頭に並べるためにはもっと作る(要求)	クッキーをたくさん作らないといけないことに気づく
	ショップの振り返りで…確認 お店には13種類中5種類のクッキーが数袋しか並んでなかった	J男…「あららら、大問題やー」		・クッキーを買いに来て売り切れ状態 ・困った…
	「これからどうしたらいい?」	E男…「もっとテキパキして作らんなん。もうちょつと時間を早く」 G子…「早く仕事を覚える」	今のままでは、仕事としてまだまだ(自己認識)	流通を通して仕事への責任や自覚が芽生えたらいいな



店頭にクッキーが並んでいないことに気づく生徒

表Ⅱ－３－９ プラタナスカフェ見学での様子

月日	教師の手だて・支援・声かけ	生徒の学習活動の様子	生徒の内面(推察)	
			要求、知識、自己認識、自己効力感	見取り、捉え等
5月 上旬	注文して食べてみて…	全員…「おいしいです」 F子…「私のは、ココナツとキャラメルが入っていました」	自分たちの作ったクッキーはおいしい(自己認識)	コーヒーに合う
	カフェの振り返りで…	H男…「クッキーが足りなかった」		順番にクッキーセットを購入したが、最後になり買えなかった人がいたことを知っている
	クッキーセットのクッキー頼んだけど「申し訳ありません。本日きらしてしましまして…」と言われたね	H男…「別のもの…」 J男…「たいへんだこりゃ」「売り切れやあ」		クッキーセット売り切れ (ショップもカフェも)
	「カフェを見学して気づいたことは？」	E男…「先生がフォローしてC男がレジして、A子が飲み物の準備をしていた」「早くお客さんに商品を出してた」	カフェの生徒の仕事を知る(知識)	3人がそれぞれに役割をもって仕事をしていることが見事だと思った様子
	「クッキー製造グループではこれから何を頑張っていく？」	E男…「クッキーを作るときに確認しながら作ったほうが良いと思った」 J男…「クッキーをたくさん作れるようにもっと努力すべきだと思った」 「ラップを破らないようにする。ラップの仕方が悪いとクッキーに入ってしまう」 F子…「砂糖の塊がないように気をつける」	・みんなで確認して作ろう(要求) ・たくさんのクッキーを作りたい(要求) ・ラップの仕方が悪いと焼きあがったクッキーに混ざるため、ラップを破らないように仕上げよう(要求、知識) ・砂糖の塊がないように生地をよく混ぜ合わせる(要求、知識)	みんなで作ろうという気持ちになっている

図Ⅱ－３－１ 見学後の生徒の感想

今日の見学でこれからのクッキー製造班でがんばること  
クッキーをたくさん作れるようにもっと努力すべきだと改めて思いました。  
型にクッキーの生地を入れる時にラップを破らないようにしようと思いました。

今日の見学でこれからのクッキー製造班でがんばること  
全体準備を早めに終えて、全員で30本以上のクッキーを作りたいです。砂糖のかたまりやサランラップのかけらが入らないように  
ていねいに作業したいです。

今日の見学でこれからのクッキー製造班でがんばること  
もっとクッキーを作りたいと  
まにあわないと思いましたが  
クッキーを作るときに同じような品にならないようにがんばりたいです。  
ほぅがよいと思いましたが

表Ⅱ－３－１０ 見学後の作業の様子

月日	教師の手だて・支援・声かけ	生徒の学習活動の様子	生徒の内面(推察)	
			要求、知識、自己認識、自己効力感	見取り、捉え等
5月 中旬	焼きあがったクッキーに砂糖の塊があったので、みんなに伝える	みんなで作業の手を止めてのぞき込む H男…「失敗作にならないように今度は気をつけて作ろうね」	砂糖がよく混ざるようにミキサーしよう(知識)	クッキーの表面に砂糖の塊があると売り物にならないことを知っている
		E男とE男をフォローしている先生に対して… J男…「手伝いましょうか?」		困っているようだから手伝おう
		F子とJ男でマーブル作りお互いに作る生地を確認している F子が要求を伝える	・どちらの生地を作るかで自分がどのようにすればいいか確認(知識) ・F子は自分が最後まで仕上げたい(要求、自己認識、自己効力感)	
		H男…「先生見てください」		自分で生地の混ぜ込み判断ができるようになってきている
		H男は、自分で生地を型に入れている。ボウルについている生地もなんとか取ろうとしている H男…「もうちょっと(取りたい)…先生手伝ってください」	ボウルについている生地をきれいに取りたい(要求)	
	見本を示す	H男…「取り方教えてください」	取り方を教えてほしい(要求)	自分でやろうとしている(「手伝ってください」をこのタイミングで言わないのはやってみた気持ちでできたかな)
	「そうそうそう、上手い!」	H男…「とれたー!」	やり方を知る(知識)	
	「やったー! 今度からできるよ」	H男…「今度からできる!」	自分でできるよ(自己効力感)	
		自分の仕事をしながら、H男がG子の「ミキサーあきました」の声をきいて、I男に「ミキサー入ってください」と伝えている		作業全体の流れ、効率についてH男はよくわかっている
		F子は、ミキサーの順番待ちで、全体の仕事を自分で見つけて取り組んでいる		作業全体に必要な仕事分かっているようだ
5月 下旬		H男がミキサー終わり、作業台に戻る先生に「卵(の準備が必要)」と伝える	次にミキサーに入る人の卵がないので用意してほしい(要求、知識)	
		H男が、違う仕事をしているF子に「F子ミキサーあいたよ」と伝えている		ミキサーの順番待ちをしていたことを知っている
		紅茶風味のクッキーを作るG子は、フレーバーがどこにあるかわからず、J男に教えてもらう	フレーバーがどこにあるのか教えてほしい(要求、知識)	J男もきちんと対応している(一昨年の経験から仕事を覚えていた)
		紅茶の攪拌の仕方についてわからなかったG子は、F子に聞いて確認している	攪拌の仕方を知りたい(要求、知識)	F子もきちんと対応している
		ミキサーの順番待ちをしているH男は、周囲を見て机拭き、計量に入る		ミキサーに入るまで自分でできることをしよう
	午後から作るクッキーカードを並べるH男に… 「最初はフレーバーの計量ないやつがいいんじゃない?」	H男…「チョコチップ」	最初にチョコチップを作りたい(要求)	
	「チョコチップは計量ないの?」	H男…「あるので、今(午前のうちに)計量します」 しばらくして、ゴマの計量も始めた	午前のうちに計量しておけば、午後からすぐにフレーバー入りのクッキーを作れることを知っている(知識)	
		J男がH男の様子を見て紅茶の計量を始めた		H男の様子を見て自分で気付いた
	「E男来週から実習やね…」 「アーモンドどうしようかなあ…」 「アーモンドクッキーなくてもいいかね…」 「どうしようかね…」 「そっかあ…」	E男…「いないから切れない」 E男…「お客さんには悪いけど…」(仕方ない)		アーモンドの仕事は自分の仕事と捉えているようだ E男の仕事として位置付けてきたから、他の人が代わりにするという考えがないようだ

## ウ. 取組を振り返って

店舗の見学は、自分たちの作ったクッキーが袋詰めされて商品化され、そして、店頭で販売されるという作り手と売り手のつながりを具体的に知ることができた機会になった。また、パッケージグループの生徒が一生懸命クッキーの袋詰めをしていたが、商品が店頭にはほとんど並んでいなかったということが、クッキー製造グループの生徒には衝撃的で、そのことから自分たちの現状が売り手や買い手に大きく影響していることに気づく機会になった。自分がお客様だったらと想像して「こんなお店嫌だ」「もう行かない」と買い手の気持ちになって答えていたことが印象に残る（表Ⅱ－3－8 太枠参照）。

この見学の実施前には、自分たちの作ったクッキーが店頭にきれいに陳列され、売り手であるパッケージグループがお客様に販売してくれているという流通の形をイメージしていた。しかし、店舗の現状を知ったことで、流通の理解だけでなく、生徒自身の作業に対する取組の姿勢も変わったと認識している（表Ⅱ－3－9、図Ⅱ－3－1 参照）。以後の作業では、自分から仕事がないか探したり、生徒同士で分からないことを確認したりと行動に変化が表れた。そのことから時間に余裕ができ、店舗見学前より、製造本数も大幅に増え、生徒それぞれの作り手としての意識の高まりにつながったと感じている（表Ⅱ－3－10 太枠参照）。

また、10月12日には、自分がないからアーモンドが切れない（＝アーモンドクッキーは作れない）と話した E 男だったが、そのことを感じた別の生徒は、後日、「アーモンドクッキーが作れないとお客様が困ります」「お客様が買いたくても売ってないから買えません」と話し、E 男の代わりに誰かがアーモンドの準備ができないかと提案していた。取組を行ってきた過程の中で、クッキーを求めて足を運んでくださるお客様に対して十分にクッキーを提供しようという気持ちが育っていることも同時に感じることもできた（表Ⅱ－3－10 10月12日参照）。

## ③新作商品をお客様に提供するために

### ア. 生徒の様子から教師が考えた支援

作業学習アドバイザーのアドバイスを受けながら作った新作「プラタナスキューブ」は昨年度末によりやく形となった商品である。年度が変わり、教師や生徒の人員の異動もあり、今年度すぐには販売に至らなかったため、1 学期は、仕事を覚えることを優先し、2 学期からの提供を計画した。通年で定番クッキーを作りながら、この商品も作ることを考えたときに、短時間で質の高さを求めたいと考え、プラタナスキューブの担当者を限定して 2 名選ぶことにした。2 名については、普段の仕事もしながら、プラタナスキューブも作り上げていくこととし、出来上がりについては 2 人（E 男、J 男）に任せることにした。

#### 支援のポイント！

- ・新作商品の製造を 2 人に任せる
- ・作業時間の中で、これまで行ってきた仕事も継続して行う

### イ. 生徒の様子と教師の手立て・支援

表Ⅱ－3－11 プラタナスキューブ製造の依頼と製造時の様子

月日	教師の手だて・支援・声かけ	生徒の学習活動の様子	生徒の内面(推察)	
			要求、知識、自己認識、自己効力感	見取り、捉え等
9月12日	2学期はずかけクッキーの他にキューブも作ることを伝え、キューブについては、2人で協力してほしいと伝える	J男…「わかりました。やりましょう！」 E男…「はい」		意欲的に取り組んでくれそう

月日	教師の手だて・支援・声かけ	生徒の学習活動の様子	生徒の内面(推察)	
			要求、知識、自己認識、自己効力感	見取り、捉え等
9月13日 午後	2人で計量も含めて作ってほしいことを伝える	J男がメインにすすめる E男はそばで見ている？		・前期に数回やったことがあるので覚えている ・E男は何をどうしたらいいか分かっていない！？ ・やりかたを覚えようとしている？
		成型の際、J男のボコボコな表面に対して、E男が、「もう少しここ…」と平らにするよう伝えていた	E男は、まだ表面が平らになっていないことを分かってJ男に伝えている(知識、要求)	
9月15日 午前	・J男がずずかけクッキーを作り出した。2本目はキューブにするように伝える ・E男には、先に自分の仕事をしてJ男がキューブを作ったら応援に入るように伝える	J男はキューブを作り出したが、E男は応援に入らない様子 E男はJ男のそばで机を一生懸命拭いていた		・お互い自分のことをしている ・2人で作り上げることへの理解が不十分？

2人に任せて始めたプラタナスキューブの製造(表Ⅱ-3-11 太枠参照)だが、売り手であるパッケージグループの生徒と事前に計画を立てて販売に向けてすすめていたわけではなかったもので、販売の依頼も2人に任せることにした。

### 【支援のポイントの修正】

#### 支援のポイント！

- ・新作商品の製造とパッケージグループへの袋詰め・販売依頼までのすべてを2人に任せる
- ・作業時間の中で、これまで行ってきた仕事も継続して行う

表Ⅱ-3-12 新商品の袋詰めに関する生徒の様子

月日	教師の手だて・支援・声かけ	生徒の学習活動の様子	生徒の内面(推察)	
			要求、知識、自己認識、自己効力感	見取り、捉え等
9月13日	パッケージグループにプラタナスキューブの袋詰めと販売を依頼することを忘れていた！	J男…「え？？」		
	J男にキューブの袋詰め、販売依頼を伝えてほしいことをお願いしたところ…	受け取ってもらえたことを報告していた		
		パッケージグループのC男が「できない」とキューブを返しに来た 数名ざわざわ…「あれ？」 J男…「えー！？」		さっきはOKだったのになんで？なんだらう
	せっかく作ったキューブ、販売できないと困るね…どうしよう	E男…「僕が行ってきます」	自分たちが作るキューブを販売してほしい(要求)	僕が伝えたらなんとかならないかな
9月15日 午前		E男は朝のうちに、パッケージグループの友だちをお願いしていたが、できないと言われていた		
	できない理由は何だった？	午前の作業中に数回、E男が理由も確認した		
9月15日 午後	ミーティングでE男にキューブの話題を振る	E男がパッケージグループができない理由をみんなに伝える		
		E男…「もう1回行ってきます。誰かついてきて！」 J男、G子、F子が手を挙げ、4人で伝えに行く…再検討にこぎつけた	なんとかキューブを袋詰めしてほしい(要求)	・今作っているキューブはどうしたらいいんだ ・袋詰めしてもらえないと作ったキューブが販売できない
	パッケージグループの返事待ちになったが、ダメだったら？	E男…「他のお店をお願いしてみても？」「誰かに…」		「作らない」という選択肢はない様子
	煮詰まり、新しい視点として			
9月16日	困ったときは、相談してみよう 誰に？先生は、先生に みんなは？…友だちに			
	プラタナス委員会にて	クッキー製造グループの現状を話し、友だちからアドバイスを受ける(パッケージのA子が再度、袋詰めについて承諾した)		
9月20日	プラタナス委員会での話を受けて、キューブをパッケージグループに渡すよう声をかける	E男が自ら責任をもって渡しに行った		よかった！ 袋詰めできたら販売できる！

今年度のパッケージグループのメンバーは昨年度より人数が減っており、通常の仕事の他、プラタナスキューブの袋詰めの仕事を増やすことは、無理な状況にあったが、「新作を販売してほしい」、「お客様に食べてもらいたい」という強い気持ちで何度も交渉に臨み、パッケージグループの工房長の承諾を得ることができた（表Ⅱ－3－12 太枠参照）。

販売は、クッキー製造グループの生徒が関わる 11 月の学習発表会とし、9 月下旬には、金沢大学の生協様の店内でプラタナスキューブの試食会を実施した。その際、実際に食べた感想や評価のアンケートも同時に行った（表Ⅱ－3－13 太枠参照）。

表Ⅱ－3－13 大学生協様での試食会に関する生徒の様子

月日	教師の手だて・支援・声かけ	生徒の学習活動の様子	生徒の内面(推察)	
			要求、知識、自己認識、自己効力感	見取り、振え等
9月28日 午前		E男…「僕たちが作ったクッキーって言うてもいいですか」	意欲的に発言している(自己効力感)	自分たちの作ったクッキーという思いを持っている
	試食会を行う際の確認をする	・E男はJ男に促され、時々役割を交代する ・E男は物怖じをせず、積極的にお客様に話しかけていた ・J男はE男にアンケート用紙の取換えなどについて、伝えたり、手伝ったりしていた	・積極的にアンケートの協力依頼をしている(要求) ・事前に確認した動きについて2人で協力して実行している	
		お客様が試食の際 E男…「できれば味のほうも教えてください」	食べた感想(味)を教えてほしい(要求)	自分から尋ねていた
		お客様からの問いかけに J男…「アーモンドブードルの粉とかも入っています」「評判がよければ、商品として売り出します」	・僕が作っているから説明できるよ(自己効力感) ・お客様の声を知りたい(要求)	自信を持ってお客様とやり取りしている
	試食会終了間際に「またする？」	J男…「やりたい」 E男…「やりたい」	またやりたい(要求、自己効力感)	お客様の反応を見て手ごたえを感じたようだ
		試食会を終えて E男:「アンケートをみたい」 ※「どちらかと言うとおいしい」をつけていた人を見ていた		・アンケートの声を受け止めようとしている ・商品をより良くしようという姿勢を感じる
9月28日 午後	アンケートの集計をするように伝える	2人で集計を取り始める	楽しそう(自己効力感)	
		たくさんのアンケートを読み、 J男…「すごい〜」 E男…「みんなおいしいって〇してる」 J男…「でももっとしつとりしたほうがおいしいって書いてある」 E男…「みんなに買ってもらいたい」	・自分たちが作ったキューブが好評である(自己効力感) ・食べた人全員がおいしいって言うてくれるようにしたい(要求)	自分たちの作ったクッキーの評価が良かったことだけでなく、改善点があることもきちんと受け止めてこれからもっと商品を良くしようと思っているようだ
	今日のアンケートの意見を見て、作業学習アドバイザーにまた教えてもらえたらいいね	うなずいている		

## ウ. 取組を振り返って

この新作商品プラタナスキューブを提供するための取組については、まだ、取組途中であるが、新しく販売する商品を2人にすべて任せるといった形をとったことで、より作り手としての責任や自覚が増したように感じている。作ったプラタナスキューブを袋詰めして商品として店頭に出せなければ、お客様に販売できないことから、パッケージグループへの袋詰め依頼を再度にわたって依頼したことや試食会で見せた行動、アンケートの声を知り、「みんなに買ってもらいたい」と話したことからも生徒自身の作り手としての自覚の育ちを感じている。これらの経過を経て、「さらにおいしく作ろう」、「見た目の良い商品をめざそう」と、さらに生徒の作る意欲が高まりを見せている。「お客様に新商品を食べてもらいたい」「おいしいと言ってもらいたい」この願いが生徒の行動を引き出し、さらに良いものを提供しようという気持ちにつながったと考える。

### （３）評価と考察

毎年構成される作業メンバーと作業内容、求めたいことをすり合わせていく中で、これまでのやり方と異なる方法で進めていかなければならないことがある。クッキー製造グループでは、柔軟に生徒に合わせて進め方を変えてきた。

①について（90 ページ）は、4 月からクッキーの製造に携わっている生徒もいれば、昨年度から携わっている生徒もいる中で、E 男にとって 5 月からの異動は、緊張と不安が続いたことと推察できる（表Ⅱ－3－5 参照）。仕事の定着と本人の自己効力感の育ち、作り手としての意識の高まりを期待し、毎回決まった仕事を必ず作業の中で取り組めるよう準備し、確認を取りながら進められたことは、E 男にとって自信につながる行動を引き出すことになった（表Ⅱ－3－6 太枠参照）。また、他の生徒に対しても自分たちの仕事が進められるのは E 男の仕事があったからという認識も育ち、相互がクッキー製造グループの目標に向かって高め合える仲間となった。

②について（92 ページ）は、自分たちの置かれている現状を見て感じることで、具体的にどうしたらよいのか考えるきっかけとなり、生徒の心に伝わる展開となった。店舗の見学は、作り手の先の売り手と買い手としての体験ができる。偶然にも店舗に商品が並んでいなかったことが、生徒の作り手としての自覚を目覚めさせるきっかけになったといえる（表Ⅱ－3－7、表Ⅱ－3－8 太枠参照）。作業の中で、形の悪いクッキーは試食用として選別されるが、試食にならないよう、少しでもきれいな形のクッキーを商品としてパッケージグループに卸せるようにという気持ちも表れるようになった。自分のしていることの意味を認識するために流通を知るという取組はとても効果的だった。

③について（96 ページ）は、日頃の作業の流れを行う中で、新作商品も自分たちの大切な商品であり、お客様に食べていただきたいという気持ちを強く持ってほしいことから、2 名の生徒に担当を任せることにした。商品が売れるか、改善の必要があるのかは、すべて、材料の計量時から決まるという気持ちを持って取り組めるように責任の重さを可能な限り大きくして取り組んだことで、自分たちがやるんだという気持ちを持って行動する姿を引き出した（表Ⅱ－3－11 太枠参照）。

これら作業での取組は、一つに限らず、すべて関わり合っていて、その時々生徒の発言や行動がまわりの生徒に影響していると感じている。お互いの意見や行動の意味を知り、感じたことでさらに考えが深まり、作り手として自覚を持ってより良い商品を提供しようという気持ちの育みにつながったと考える。さらに、本校に招聘している作業学習アドバイザーによる本格的な取組は 2 学期から実施、実践している。企業の菓子製造に携わるアドバイザーをお招きしたことで、クッキー生地混ぜ合わせ方や成型の仕方などに、質の高い技術の向上が見られるようになった。生徒自身が自分の製造への取組が適切なのか、どうしたら上手くなるのか、積極的にアドバイスを受けようとする姿も見られるようになり、作り手としての責任を持って日々の作業学習に取り組めるようになった。

#### 4. まとめ

今年度の研究では、生徒の技能と働く上で必要な資質の向上を目指した作業学習の充実改善を図るための授業作りを行った。

今回の2つの実践はそれぞれ「カフェでの接客」や「クッキーの作り手としての自覚」を生徒にどう意味付け、価値付けしていくのか、そのためにはどういう支援や手立てが必要なのかについて考える授業作りであった。

ここでは、2つの授業作りの実践をキャリア発達支援の視点から振り返ると共に我々教師の学びについて述べる。

##### (1) 実践Ⅰについて

実践Ⅰでは、お客様の立場を考えた接客や、一緒に働く仲間を意識したり、助け合ったりできるようになることを目指して取り組んできた授業作りである。

この実践でキャリア発達支援として留意したのは以下の5点である。

##### ①本物に触れる

作業学習アドバイザーが勤務する店舗に行き、講話を聴いたり、実際の接客場面を見学したりして本物にふれる機会を設定した。接客場面ではプロの店員の臨機応変な対応を間近で見ることができた。10月には作業学習アドバイザーをカフェに招聘して接客についてプロならではのアドバイスをいただいた(83ページ参照)。

また、生徒が課題と感じている事柄を質問する機会を提供した。生徒たちは作業学習アドバイザーに「レジで失敗しないようにするためにはどうしたらよいですか?」「笑顔で接客するためにはどうしたらよいですか?」などの質問をしていた。

##### ②教師と生徒が互いに助け合う関係性を構築

教師もスタッフの一員として生徒と同じように仕事に取り組み、チームとなって互いに助け合う関係性を構築した。教師も生徒と同じ作業や接客をする様子を生徒が見ることで教師が生徒のモデルとして機能した。

##### ③問いかけと対話

自らを振り返るような問いかけをして、生徒が自ら考え気づきながら成長していけるように配慮した。活動の振り返りの機会を持つことで自分の苦手なことを自己認識して課題として受け止めた。自分で努力してもなかなか改善できないことに対して向上心をもってプラタナス委員会では先輩にアドバイスを求めたり、作業学習アドバイザーに質問したりと課題解決に向けて自ら積極的に取り組むことができた。

##### ④実践の機会を増やす

「接客」の機会を増やすために作業月間での連続勤務シフト編成、学校説明会での来校者への商品の説明、校内職員からの直接の受注や配達などを行った。

取組の中で、注文されたメニューの仕上がりにより少し時間がかかっている場面でカフェを注文されたお客様に対して「少々お待ち下さい」と声かけをしたり、新商品の試食を勧めたりとお客様を待たせないような心配りや自分で考えた言葉かけなどその場に応じて臨機応変な対応をしている様子が見られた。

また、カフェでは来客の合間に商品の袋にシールを貼る作業を並行して取り組んでいる。従来はレジに背を向けた場所でその作業を行っていたが、それではお客様の来店に気付かず、即座に「いらっしやいませ」が言えないと考えて、お客様が来店したらすぐにわかる場所でシール貼り

の作業をするようになった。

#### ⑤「ありがとう」と言われる側になる<sup>(1)</sup>

お客様の「ありがとう」「このクッキー美味しかったよ」などの感謝や認められる言葉が生徒の自尊感情や自己有用感を育み、それが接客の自信へとつながると考える。生徒 A はお客様が少ない日は「お客様が少ないのでしょぼん」、お客様が多い日は「お客様が多いので嬉しい」などと発言している。接客の自信がついたからこそこのような発言もでてくるのではないかと推測する。また、接客に自信がつくことで笑顔にもなるという良循環が見られた。

### (2) 実践Ⅱについて

実践Ⅱでは、クッキーの作り手としての自覚を育てるために

- ・材料購入や配達をしてくれる工房に感謝し、作り手として自慢できるクッキーを作ること
- ・クッキー製造全般に関わる仕事について、必要性や意味を理解した上で自分から取り組むこと
- ・ひとつの製造チームとして、生徒が互いに必要に応じて協力したり、確認したりして作業を進めること

を目指して取り組んできた授業作りである。

この実践でキャリア発達支援として留意したのは以下の 4 点である。

#### ①生徒の「できること」を通して役割を担い「認められる」場の設定や雰囲気作り

年度途中にクッキー製造グループに異動してきた生徒に所属意識や自己効力感を育むために本人の性格や特性を考慮して、全ての工程を任せるのではなくて、毎回決まった仕事（アーモンドを切る仕事）を担当させた。仕事を始めた 5 月当初はとてもぎこちない様子であったが、7 月には主体的にアーモンドを切る準備を始めて、切り終わると「できました」と誇らしげに報告するまでになった（91 ページ 表Ⅱ-3-6 太枠参照）。その間、教師は他の生徒に対して本生徒の仕事が自分たちにとっても有用であることを感じられるように場面に応じて確認、声かけしながら取り組んだ。それに伴い互いの存在を認め合う関係へと発展した。

生徒の「できること」を通して役割を担い「認められる」ことを通して成長していく過程はキャリア発達と言える姿である<sup>(1)</sup>。

更に、この取り組みの中では自己効力感の育みや互いを認め合う関係の構築のための教師の他の生徒への知識の提供といったキャリア発達支援も見えて取れる。

また、10 月にアーモンドを切る仕事を担当する生徒が現場実習のため不在になることに、本人の代わりを誰がするのかを生徒が自主的に協議する姿も見られた。その協議の様子からは代役の相談と共にお客様に十分にクッキーを提供しようという気持ちが育っていることが感じられた。

これは高等部で目指すキャリア発達である「生徒が自分たちで物事を考えて進めていくこと」や「働くことへの自信や前向きな気持ちを持つこと」につながるものである。

#### ②実際の現場を見学して流通を学ぶ

クッキー製造の生徒たちがパッケージグループのクッキー販売現場を見学することで流通を肌で感じる体験を企画した。これは「なぜ、何のためクッキーを作るのか？」というクッキー製造作業の意味付けをねらいとした取組である。現場を見学したことで、今自分たちが何をしなければいけないのかという自覚が生まれ、以前よりも能動的に作業に臨む姿勢が見えるようになった。

これは高等部で目指すキャリア発達である「課題に取り組むためには今何が必要で何が足りないのかを生徒自身が考えて気づけること」につながるものである。

### ③「役割」と「責任」の自覚

新商品の製造を特定の2人に任せて「役割」と「責任」を明確にすることで、生徒が主体的・意欲的に行動する姿を引き出すことができた。

大学生協での試食会ではお客様にアンケート用紙の記入をお願いする際に「できれば味の方も教えてください」とことばをかけている様子からは、「おいしいクッキーを作ってお客様に提供したい」という思いが見て取れる（98 ページ 表Ⅱ-3-13 参照）。

### ④本物に触れてプロの技を見る

生徒にクッキー作りの自覚を育てるための手立ての1つとしてプロの仕事の様子や心構えを見聞する機会を設定した。

初回は洋菓子製造販売企業に行き、菓子製造の様子を見学した。パティシエの方々が衛生面や身だしなみに気をつけている様子を生徒が見る良い機会になった。生徒は自分たちもお客様に届けるクッキーを作るために衛生面や身だしなみに気をつけなければならないことを改めて認識できた良い機会となった。

また別の日には洋菓子製造販売企業のパティシエを作業学習アドバイザーとしてお招きして、指導助言をいただいた。指導助言の1つとしてクッキー生地混ぜ方を教えていただいた。従来はヘラで生地をこねるように混ぜていたが、作業学習アドバイザーからヘラで生地を切るように混ぜることを学んだ。これにより生地作りの技能の向上が見られた。

また、体調不良で作業学習を欠席したことのある生徒は、作業学習アドバイザーに「体調管理で気をつけることは何ですか？」と質問をしてアドバイスをもらう場面もあった。

## （3）教師の学び

### ①「なぜ」「何のため」を重視する姿勢<sup>(2)</sup>

従来本校の作業学習では、「なぜ、何のために今、目の前の作業をするのか」という作業の意味付けの視点が若干弱い側面があったのではないかと思える。

3年間の作業学習の充実改善の取組を通して、今の目の前の作業が次にどうつながるのか、他の工房とどう関わっているのかなどの作業の意味付けや価値付けを意識した支援を心がけていくことが大切であるという教師側の姿勢を確認した。

この「なぜ」「何のため」という問いは作業学習だけでなく、「なぜ遅刻をしないことが大切なのか」「なぜ部屋の隅々まで掃除をすることが大切なのか」といった生活全般にわたる生徒のふるまいに関わる事柄にも求められる問いである。そうする理由を理解することで物事の本質を捉えられるようになり、突発的な事態が起こっても臨機応変な対応ができるようになると考える。

作業の意味付けや価値付けを意識した支援のための試みの1つとして今年度はクッキー製造グループがパッケージグループの販売現場を見学して流通を肌で感じる機会を持った。そのことで生徒の作業への意識が以前よりもより能動的になった様子が見られた。

### ②教師全員で生徒を共通理解する姿勢

従来は各工房の担当教師が所属する生徒についての目標や支援の手立てを考えていた。今年度は学部の研究会で各作業グループの授業の様子のビデオを見て教師全員で生徒のキャリア発達を促す教師の支援方法や授業のあり方の検討を行った。そこで出された意見や支援の視点は担当教師だけでは思いつかなかったものもあり、その後の授業作りに役立った。今年度行った各作業グループの授業の様子の録画を教師全員で見ながら生徒の支援方法や授業のあり方を検討する試み

は一人の生徒を高等部教師全員が共通理解する機会として機能した。

「なぜ、何のため」を理解するための各工房間相互の見学と、教師全員で生徒を共通理解する姿勢は生徒のキャリア発達支援の1つの方法として有効であると思われるので来年度以降も継続していきたい。

#### 参考文献

- (1) 菊地一文 (2016) 「気になる子のためのキャリア発達支援」  
特別支援教育 ONE テーマブック 10 青山新吾 編集代表 学事出版
- (2) 菊地一文 (2016) 「児童生徒のキャリア発達を促すための授業づくり」  
金沢大学附属特別支援学校 平成 28 年度文部科学省キャリア教育・就労支援等の充実事業 研究フォーラム講演内容